マスコミ特集

OB・OGの職場探訪

ぴあシステム開発局

上井 伸さん（2001年文学部卒）

駅の売店で、コンビニで、ひと目で分かるあの雑誌―『ぴあ』。チケット購入でぴあにお世話になっている方もきっと多いだろう。そんなぴあでお仕事をしている中大出身の社員はどんな方なのだろうか―。

会社の転換期を支える10年ぶりのシステム・チェンジ

入社してから七年目の上井伸さん（29）。2001年3月、中央大学文学部文学科英米文学専攻卒のOBである。上井さんはラフな服装で、待ち合わせていたぴあ本社の会議室に姿をみせた。自由な雰囲気の漂う本社には、他にも私服で仕事している方の姿が数多く見える。

早速、上井さんにお話をうかがった。

――現在はどのようなお仕事をなさっているのですか。

上井　来年、ぴあのチケッティングシステムの抜本的な切り替えを行うため、その新システム開発プロジェクトに携わっています。これまでもマイナーチェンジはしてきたのですが、今回のような大規模な切り替えは10年ぶりです。

〈創業35周年を迎えるぴあで、社が総力をあげているプロジェクトである。上井さんの仕事は、そのプロジェクトの全体管理だ。今年、ぴあの売上高は1千億円を突破した。そのうち8割を占めるチケット事業の大きな転換期である〉

――大きなプロジェクトに関わるのは、やりがいがあるでしょうね。

上井　システム開発を請け負っている会社に対して要求をするための社内調整、課題解決などを行っています。裏方として支えるつもりでやっています。

笑顔がさわやかな上井さん

振り出しは購買部で用紙の発注 社長室、全社戦略室で企画力磨く

――入社してから今まではどのようなことをなさってきたのですか。

上井　入社同期は僕を含めて10人いて、入社したあとに適材適所で部署が決まります。私は購買部に配属されて雑誌の『ぴあ』『TVぴあ』などの用紙発注を担当していました。

雑誌ぴあは入社時にかかわった

〈そう言って上井さんは雑誌ぴあを取り出し、ぱらぱらとめくった〉

上井　これだけで5、6種の紙を使っていますね。紙の中には「ぴあ○○」というような銘柄のぴあ専用の紙もあるんです。

〈手触りや、光沢などから上井さんは瞬時に紙の素材を見分けることができる、という〉

上井　二年目からは社長室担当になりました。社長の出席する会議の議事録をとりまくっていた（笑い）。創業30周年のイベントの手伝いや、その時々でさまざまな仕事をしました。4年目には全社戦略室へ異動して、今後5、6年の間にこれからどのような事業をしていくか、どのようなサービスを提供するかということを企画していました。

ホワイトバンドをネット事業で分からないことは、どんどん聞く

〈その後に現在の部署のシステム開発部へ移った。異動は人それぞれ。上井さんの同期の中には7年間部署が変わっていない人もいるという。同期の多くが、チケット仕入れや広告営業などの「現場」で働く中で、上井さんは違ったキャリアを重ねてきた。それが現在の上井さんの仕事につながった〉

――今まで一番やりがいを感じた仕事はなんですか。

上井　一番というと、記憶にあるのは全社戦略室にいたとき、ホワイトバンドのインターネットでの販売権を獲得したことでしょうか。当社の通販の担当者と一緒に営業して相手先を説得しました。結果、ホワイトバンドの流行により成功し、その後に類型の仕事がぴあに舞い込むようになりました。

自分が関わった仕事が成果を出し、それを基点に会社に次の新しい動きが生まれた。そういったときには一層やりがいを感じます。

――それでは、今までで一番辛かったことは？

上井　辛い、というか、壁にぶつかったなと思うことは、数多く経験した部署異動でしょうか。今のシステム開発部に異動した時も、初めは他の人たちが専門用語で話をしているので何を言っているか分からない。そういうときは、分からないことは遠慮せずどんどん聞くことにして、克服するよう努めてきました。

就職超氷河期で内定までイバラの道
「感動創造企業」に惹かれる

△そこで、就職活動を控えた現役3年生が気になる「シューカツ体験談」を聞いてみた▽

――上井さんの就職活動はどんなものでしたか。

上井　私のときは、就職超氷河期とまで言われていて、内定まではイバラの道でした。50から60社は受けたと思います。そして、運よくぴあに拾ってもらいました。

――1万人を越える受験者のうち、内定者はわずか10人ですか…。内定を得る〝極意〟はなんですか。

上井　口だけは達者だったから（笑い）。それと、会社がやろうとしていることと自分の考えが合致していたからかもしれないですね。

――他社にも内定していたのですか。

上井　うん、そう。でも、やりたいことが出来そうなぴあを選びました。学生時代に7年間、音楽を、特にクラシックギターをやってきて、音楽にかかわっていることが好きでした。サークルでもマンドリンクラブに所属してギターを弾いていました。3年のとき、学内セミナーでぴあの説明会を聞き、単に音楽に関わるというより、「感動創造企業」を企業理念にするぴあに惹かれました。

――これから就職活動を控えている私たちに何かメッセージをいただけますか。

上井　私が就職活動をしたときは、企業の求人数が実際の就職希望者を下回り、中大生でも「就職浪人」する人がいるような時期でした。でも今は違う。だからといって、就職活動を「なんとなく」ではなく「必死に」やらないと後悔するのではと思います。私は一生懸命に就職活動をできたと自分自身で納得しています。だからこそ、入社後にやめたくなるような瞬間があっても、当時の頑張りや決断を思い起こすとグッとこらえることができる。最初に入った会社というのは一生においてすごく大事だと思います。だからこそ納得のできる就職活動をして欲しいですね。

☆　☆　☆

来年発表されるというぴあの新しいシステム、一体それはどのようなものなのだろうか――。私たちの生活を豊かにする一枚のチケット。その大きな仕事を担う上井さんのまなざしは輝いていた。

（学生記者　池内真由＝法学部3年）

いまはチケットぴあの新システム開発に取り組んでいる

マスコミ特集

OB・OGの職場探訪

小学館『Ｊｕｄｙ』編集部

大野美和さん（2000年商学部卒）

少数精鋭3人の編集部 早出に、遅出は未明帰宅も

室内にはカラフルな漫画のポスターが壁を覆うように貼られている。デスクの上は山積みされた膨大な資料、巨大な封筒などで占領されている。隣のデスクには大きなカッター台がドーンと載っている。小学館『Ｊｕｄｙ』編集部にお勤めの大野美和さん（30）は、出版社の編集者らしい、お洒落な私服姿で迎えてくださった。

『Ｊｕｄｙ』は20～30歳代の女性を読者層にした月刊のコミック誌。『Ｊｕｄｙ』編集部は大野さんを含めて3人。少数精鋭、責任は重い。他には編集プロダクションやデザイナーなど多くの人々が関わっている。

編集の仕事は朝定時に来て、夕方定時に帰るというわけにはいかない。早出は午前11時頃、遅出は午後2～3時で帰宅は翌日の午前1～2時になることもある。「原稿が上がらなければ、帰れないので」と笑う。漫画家である作家とのコミュニケーションが重要視される仕事だ。

机の上は資料が山積み

数々の表紙パターン試作 「綺麗なものを作りたい」

コミック誌編集者の仕事の一部は次のような流れで進む。まず今回はどのようなものを描くか、作家と打ち合わせをする。その後、作家から「プロット」と呼ばれる話の流れを文章にしたものが届く。その段階でそれが面白いものか、作家が描き続けていけそうか、入念に読み込んでチェックする。

次に「ネーム」と呼ばれるコマ割りがしてあり、吹出し・台詞が入った簡単な構図が届く。そこでも面白くなければ打ち合わせをして調整する。それから「下絵」が届く。「あおり」という各連載漫画の始めのページに書いてある、話を盛り立てて読者に関心を抱かせるようなフレーズを考えるのも、編集者の力量が問われる仕事だ。絵柄や主人公の気持ちに合わせて考える。

表紙も編集する。「書店に並んでいる形にして実際に見てみないとイメージが湧か

専任は『JUDY』の編集

残っている仕事が2つある。

２０００年に商学部経営学科を卒業し、入社したての頃はテレビ誌を担当していた。そのテレビ誌で有名人に連載をしてもらおうとしていたが、断られ続けていた。ＴＢＳの安住伸一郎アナウンサーに何通も手紙を送り、1ヶ月ほどしてようやく了解をもらったときには、えもいわれぬ喜びを感じた、という。もうひとつは『Ｊｕｄｙ』担当になってからで、ある作家の作品が読者アンケートのトップに躍り出たことだ。「展開が弱い」という大野さんの意見を聞いた作家が、自分のテイストに織り込んで作品を創るようになったことが、読者に受けたのである。

作家にとっての編集者の存在とは何なのだろうか――、と聞くと、即座に次のような答えが返ってきた。

「一言で言うなら応援団。作家さんが楽しく描けるように方向性を示し、道を開いていくのが黒子としての編集者の役割です。1人だけで考えるより2人で考える方が、確実に面白いものを描けるから」

大野さんは、自らの感情を豊かにするためのイメージトレーニングも欠かさない。作家の作品創りを影で支えるために、日々様々な感情を持つ状況を考えてみる。どうすれば人から好かれるか、嫌われるか。どうすれば人の心を動かせるか、どうすればドラマチックに感じられるか。たまに人に対して、少しだけ意地悪な視線で見る。

自分の感情と一般読者との感情が合っているか、について真剣に考える。それもこれも「読者の方の感情を大切にしたい」からだ。

仕事は「楽しい趣味」世界に広がる『漫画』

大野さんにとって「仕事」とは――という問いには、「楽しい趣味です」。待ってましたとばかりの素早い返答だった。

もともと漫画好きだ。「文化や言葉の違いという枠を超えて、世界に広まっている日本の漫画には普遍的な要素がある。それも魅力的だ」と話す。「毎日がワクワクとドキドキの連続で、常に変化があるから楽しい。楽しい部分をさらに引っ張り出して、さらに楽しくなる」と目を輝かせる。

ハードな生活をしていても疲れを微塵も感じさせないパワーは、この考え方からきているのだろう。

学生時代に取り組んだことは――との問いには、ない」と、デザイナーから送られてきた何パターンもの表紙をカッター台の上で実物大に切っていく。文字の色違いや、構成をとことん考える。

「綺麗なものを作りたい」という一心から、数々の表紙パターンの上には、この部分が駄目だという細かい注意書きがしてある。

編集者は作家の〝応援団〟読者の感情を大切に考える

小学館に入社して5年。これまでに特に心に

「合コンやゲームなどの遊び」と笑って答えた。

就職活動は、3年生の10月頃から本格的に始めた。記者が最も気になるES（エントリーシート）についていくつか質問してみた。マスコミ業界には、一般企業とはちょっと変わったESを提出しなければならないところが多いと聞いているからだ。

ESでアピールすべきは自己 そして大事な仕事への好奇心

ESには『どういう仕事がしたいか』という質問と、逆に『したくない仕事は』という問いもある。大野さんは、「そこで『○○はしたくない』などと書く学生を企業は求めていない。むしろ『何でもやります！　勉強になりますから！』と考えられる人材を求めている」という。

おしゃれな大野さん。編集者らしい

「採用側は、学生が企業にとって有益かどうか、仕事について好奇心を持っているかという観点から見ている。質問にそのまま答える必要はない。相手が求めている答えを、上手く見抜くことがポイントです」

また自己をアピールすることが大事という。「いかに人の心を捉えるか。面白そうな学生だ、と自分に興味を持ってもらうことが重要」とアドバイスしてくださった。

大野さんは、就活でマスコミセミナーに参加し、OBに話を聞いた。「活動中、大勢の人と会って話を聞いた。その他にも、私はかなり努力してきた、と断言できる」と、後悔しないだけの努力をすることの大切さを説いた。また某出版社でバイトをしていた経験もあるというが、「出版社でのバイト経験が特に有利になることはない」と明快に言い切った。

表紙を実物大にカット

できることを精一杯やる 自分を信じて頑張って!!

最後に就活を控えた学生にエールをお願いした。

「したい仕事とできる仕事は違うもの。まずできることを精一杯してから、主張すべき。私は本来こんなことをしている人ではない、と自分を過大評価している人もいる。しかしどんな場所でも吸収できることはある。自ら楽しい環境に変えていくことは大事。これからの人生で嫌な思いをしたり、へこんだり、思い通りにいかないことは山ほどある。でも君たちの未来は明るいはず。自分を信じて頑張って！」

（学生記者　池田園子＝法学部3年）

マスコミ特集

OB・OGの職場探訪

電通新聞局

北村美樹さん（2004年総合政策学部卒）

オフィスとは思えない、明るく斬新な空間に驚いた。「カレッタ汐留」は、電通の本社である48階超高層タワーを中心とする複合ゾーン。そのロビーで待ち合わせた。お会いするのは初めてだ。

魅惑的な高層ビルに映える社員 仕事は新聞局全体のサポート

入り口から大勢の社員が出てくるお昼休み。ロングヘアーの、キレイなお姉さんが現れた。もしかしたら、あの人が…と思ったら、目と目があった。目が大きくてスラッと長身。僭越ながら「デキル女」といった感じだ。

「このオフィス、すごいよね。私が電通に惹かれた理由でもあるんですよ」と北村美樹さん。〝天下の電通〟とも言われる広告代理店に4年前に就職した2004年総合政策学部の卒業生だ。

北村さんの職場は新聞局計画推進部。

「私はお金の管理を含む局のサポートをしています。新聞社ごとに担当者が分かれているのですが、それらをまとめたり、新聞業界の活性化に繋がるプランづくりや新たなビジネスづくりなどの作業をしています」。責任重大な仕事だけに、上の人と関わる機会が多い。「大先輩に感謝されることも。頼られていると感じるのが嬉しい。それがやりがいです」と責任感あふれる顔を見せた。

卒論は就活マニュアルビデオ セミナーで同じ夢持つ仲間と出会う

そんな北村さんは、どんな中大生だったのだろうか。

「大学ではゼミに力を入れていました。松野良一教授のゼミで映像を制作していました」。卒論ビデオでは『就職活動マニュアルビデオ』を制作した。「グループディスカッションのいい例・悪い例や、各業界の先輩方へのインタビューなどをまとめたものです」。

就活を控えている記者には、ぜひ見せていただきたいビデオだが、「家にあると思いますけど・・・お恥ずかしいです」とはにかまれた。

北村さんが広告業界を目指し始めたのは、2年次のゼミで出会った先輩の影響だという。3年次には早稲田セミナーの広告ゼミでも就活に向けて

笑顔が素敵な北村さん

の対策をした。仲間と面接やエントリーシートの評価のし合いなどをしたという。モチベーションの高さは、人一倍だった。

「セミナーでは同じ夢を持つ仲間と出会えたことが大きいですね。大学の友達には恥ずかしくて言えないようなことも、言い合えたり見せ合えたりできました。OB訪問もたくさんしましたね」

新聞局で局全体のサポートをするのが仕事

叱ってくれた先輩との出会いが転機 第一志望が電通。でも多くの社試す

そのOB訪問の中でのある人との出会いが、北村さんが電通を目指す大きなきっかけとなる。「訪問した電通の先輩が、本当にいい人で」と振り返る。

エントリーシートの書き方もわからない状態だった北村さんを、その先輩は「もう一度やり直してこい」と叱ってくれ、入社試験前は面接対策までしてくれたという。仕事で忙しいはずなのに、時間を割いて親身になってくれた先輩に出会い北村さんは、「心から尊敬しました。こういう人になりたい、そしてこういう人の下で働きたい、そう思いました」という。先輩との出会いが、北村さんにとって大きな転機になった。

「電通は第一志望でしたが、広告・テレビ・出版など30社くらい受けましたね」。度胸をつけるためにアナウンサー試験、グループディスカッションに慣れるために他業界も進んで受けた。

資料をかかえて颯爽と

「面接試験は、いかに一貫性を持って話せるかが勝負。私がこの会社に内定できたのも、自分はこういう人間で、こういうことをしてきて、内定したらこういうことをしたい！ということを、熱意を持って明確に伝えられたからだと思います」

それから「研究心もとても大事ですよ」とアドバイスをくれた。「きっかけは何であれ、興味を持ったことは研究すること。まずは自分の目で、

超高層ビルの電通本社前で

足で研究すること。〝まずは知ること〟がその先へ踏み出すワンステップだと思います」。それを実践してきた北村さんの言葉には説得力がある。

人と出会ってなんぼの広告業界「聞き上手」になるための研修も

広告業界に通じる人とは？　と尋ねると、「この業界は人と出会ってなんぼの世界。人間に興味をもたなければ始まりません」と明確な答えが返ってきた。広告業界は、相手を知って、そして掴み、己をアピールするコミュニケーション能力が問われる一種の接客業に通じるものがあるようだ。

電通の研修には相手の話を聞くときの相槌の打ち方などを学ぶ「聞く練習」もあるという。〝聞き上手〟であることがスムーズに仕事を運ぶコツなのだ。

「お客様あっての代理店ですからね。クライアントの意見を聞き、いい案をつくっていくためには、いかにしてコミュニケーションをとって話を聞き出すかが重要です」。苦手な人とはあえてコミュニケーションをとり、相手との理解を深めようとするのも北村流だ。

「プライベートでも飲みに行ったり。仕事とリンクしていなくてもいいんです。その人を知っていくことが面白い。相手を知ることを〝面白い〟って思える人がマスコミに向いているんじゃないかな」

営業でユニバーサルデザインを今はネットワーク広げベースづくり

入社して今年で4年目。「学生の頃イメージしていた広告業界と、実際はだいぶ違っていましたよ」と笑う。「当初は営業に行きたかったんです。小学生の頃から老人施設・障害者施設などでボランティア活動に参加していたので、〝ユニバーサルデザイン〟をつくりたいと思っていました」

もちろんその願望を捨ててはいない。そのためにも、「今は局内のサポートをしながら人脈ネットワークを広げ、自分のベースを作っていきたい。ネットワークを広げた上で、営業に行きたいです」と熱く語る。

「私は『新聞なら北村だ』とか、『このジャンルなら北村に任せよう』って言われる自分の得意分野をつくり、人から頼られるような存在になりたいですね」

将来展望を確かに見据える、その堅実さは学生のころから変わっていないのかもしれない。

（学生記者　山崎綾香＝法学部3年）